

— 第83編 — ソウルの骨董・伝統工芸通り

ソウルに行くたびに必ず足を向ける所がある。仁寺洞（インサドン）と呼ばれる中心街区の鍾路区にある地域である。仁寺洞キルという通り沿いに多くの骨董品店、古美術店、陶磁器店、ギャラリー、喫茶店、伝統工芸品店、土産物店などが並ぶ、ソウルの文化の街として知られている。朝鮮王朝時代（1392年～1910年）には王宮に勤める両班たちが住む屋敷が立ち並んでいたという。今でも古い伝統的建築様式の韓屋（ハノク）^{*}が仁寺洞付近には数多く残っている。韓国で活躍する建築家の友人は、その2軒を手に入れ、保存・改修を行い自邸として暮らしている。ちょうど冬だったこともあり、オンドルや紙張りの床に太鼓張りの障子など、日本の伝統家屋とは全く異なる居住環境の質に魅せられた。



写真83-2 再開発された立体インサドン



写真83-1 インサドンの再開発

*1
Hanok: 韓国伝統の建築様式による家屋。次編参照



写真83-3 壁面の表情

当時のこの一帯は寛仁坊および大寺洞という町であったが、その後統合し一字ずつをとって仁寺洞となった。19世紀末には困窮した両班たちが伝来の品を売り払う店を開き、以来ソウル在住の外国人たちが訪れる骨董品売上の街となったのだという。大勢の人がそぞろ歩くメイン・ストリートの仁寺洞キルからは無数の路地が横に入り、迷路のような一帯に迷い込むのも楽しい。路地沿いには昔からの韓屋や塀が続いており、奥の奥まで多くの店が客を待っている。私はこの路地が好きだ。ソウルの友人たちと飲んだり食ったりするのもこのあたりの小さな韓屋を改造した店であることが多い。

その一画が再開発され、迷路を立体化したような3階建ての若い顧客をターゲットとした商業・文化施設ができた。軽やかで比較的ローコストのつくりは意外にも周辺となじみ、このまの気取らない新たなマグネットとなった。それでもやっぱりここに来るのは骨董屋や陶磁器屋をひやかし、和紙の原点となった鋤紙の店を巡り、そして大好きなマッコリや卓に溢れる白い磁器小皿に取り分けられた朝鮮料理やお茶を品定めし、満喫するためである。



写真83-4 インサドンの路地